

「風が」は昭和 42 年、作曲家の高田三郎が、山形出身の詩人・吉野弘の詩に作曲した合唱組曲《心の四季》の第 1 曲。高田は特に合唱曲に注力した作曲家である。本曲の詩は吉野の書き下ろしだが、タイトルは高田の案によるもので、移ろう四季の「見えない時間」を歌う。

「春よ来い」は、数多くの童謡の名作を残した弘田龍太郎の作曲。作詞の相馬御風は、新潟県糸魚川の人で、出身校・早稲田大学の校歌「都の西北」の作者でもある。詩は大正 12 年に雑誌『金の鳥』に発表されたもので、歌詞に登場する「みいちゃん」は御風の娘。

「うれしいひな祭り」は、ひな祭りを歌った定番曲で、昭和 11 年初出のレコードでは作曲者・河村光陽の長女・河村順子が歌ってヒットした。詩はサトウハチローが娘にひな人形を買った際に作詞したものと言われている。

「こいのぼり」の初出は昭和 6 年。作曲者は不詳、作詞者も長らく不詳だった。国文学者を父に持つ近藤宮子が提訴して作詞者としてようやく認められたが、すでに著作権は切れていた。真鯉(父)と緋鯉(子)という対比は武家発祥の行事に由来している。

「みどりのそよ風」は、昭和 23 年に NHK ラジオで発表された童謡。生涯後半を埼玉県の現・和光市で暮らした男性詩人・清水かつらが、白子川ののどかな春の風景を描いた。作曲の草川信は雑誌『赤い鳥』に参加し、多くの童謡の作曲を手がけた。

「海」は、大正 2 年初出の文部省唱歌。同名異曲が他にもあるが、この曲は作詞作曲ともに不詳。昼と夜の海の情景を歌っており、平易な日本語が美しく、最後のリフレインが心にしみる。

「栄冠は君に輝く」は、昭和 23 年に発表された「全国高等学校野球選手権大会」の大会歌。毎夏、甲子園球場の開会式・閉会式で奏される。2020 年 NHK 連続テレビ小説『エール』では本曲制作の経緯が一つのエピソードとして登場した。作詞は石川県出身の作詞家・加賀大介、作曲は戦前から戦後を通じて膨大な歌を残した古関裕而。

「少年時代」は、平成 2 年にリリースされた井上陽水 29 枚目のシングル。井上陽水の代表曲でもあり、東宝映画『少年時代』の主題歌ともなった。なお、作曲の共作に名を連ねている平井夏美とは、作曲家としても活動した音楽プロデューサー川原伸司の変名である。

「初恋」は、島崎藤村の文壇デビューとなった第一詩集『若菜集』に収められた有名な詩で、幾多の作曲家が作曲している。本曲は若松甲による作曲で、まず昭和 38 年に小林旭のレコードの B 面曲として発売され、次いで昭和 46 年に舟木一夫が歌って大ヒットした。

「野菊」は、昭和 17 年に発表された文部省唱歌。作詞の石森延男は北海道出身の児童文学者。作曲の下總皖一はベルリンでヒンデミットに師事したのち、東京音楽学

校(現・東京藝術大学)で教え、門下には團伊玖磨や芥川也寸志がいる。

「耳をすましてごらん」は、昭和47年のNHK連続テレビ小説『藍より青く』の主題歌。作詞はドラマの脚本を書いた山田太一、作曲は同ドラマの音楽を担当し、現代音楽の高名な作曲家でもあった湯浅譲二。本曲を歌った本田路津子は同年のNHK紅白歌合戦にも出場した。

「寒い朝」は、昭和37年にリリースされた女優・吉永小百合のデビュー・シングルで、石坂洋次郎原作の映画『赤い薔と白い花』の主題歌。吉永は本曲で同年のNHK紅白歌合戦に初出場した。作詞は戦前から戦後にかけて数多くのヒット曲を手掛けた佐伯孝夫、作曲は哀愁漂うメロディに定評のある吉田正。

「はるかな友に」は、日本の合唱界に多大な貢献を果たした作曲家・磯部俣(いそべとし)の作詞作曲。昭和26年の夏、磯部が早稲田大学グリークラブ在籍中に書かれた。最初は無伴奏の男声合唱曲だったが、様々に編曲され、のちにボニージャックスのシングルとして大ヒットし、合唱のみならず広く愛唱される曲となった。

「思い出のアルバム」は、昭和36年初出。幼稚園の卒園式の定番曲で、誰しも歌ったことがあるだろう。一年を振り返り、小学校入学へ希望をつなぐ。作詞の増子としは墨田区で保育園長を務め、作曲の本多鉄磨は調布市の幼稚園園長だった。